



橋本 五郎氏
読売新聞特別編集委員



進藤 孝生氏
日本製鉄㈱
代表取締役会長



丑田 香澄氏
(一社)ドゥーラ協会理事
(一社)ドチャベンジャーズ理事



岡部 大氏
お笑い芸人

をこいで通学したと、秋高三大行事を頑張ったことが思い出に残っている。

私の初舞台は高校の学園祭であった。今は別の道に進んでいる秋高の同級生の相方が大学時代にお笑い芸人になろうと誘ってくれた。その相方がいなければ今の自分はいなかったと感謝している。

近藤 (生徒会長) 現在理数科に在籍して、探求活動の一環で生物の研究をしている。将来は医療関係の道に進みたいと考えている。

畠山 (生徒会執行部) 生徒会執行部と陸上部に所属していて、法律に興味があり、本を読んだり講座に参加したりしている。運動部だった進藤さん、岡部さんと会えて光栄だ。

3人の先生の教え、忘れず

橋本 新聞記者になりたいと思ったのは中学3年生から高校生にかけての時である。当時43歳でアメリカの大統領になったケネディ大統領の米ソ会談の内幕を詳細に報じたニューヨーク・タイムズのジェームズ・レストン記者の影響を受け、痛切に新聞記者になりたいと思った。

私には3人の先生がいる。まず、鈴木健次郎先生だ。「汝、何のためにそこにありや」をいつどこで誰に問われなくても断言できる人間になれ」と言われ



たことはその時の情景とともに今でも鮮明に覚えている。2人目は自分が胃を全摘手術した時の主治医の先生で、「二日一日を大切に過ごさない」と

言われ、23年が経つ。その時、自分には見えないものがたくさんある。新聞記者として見えないものを見ていかなければいけない。そのためには一日一日を大切にしようと思いついた。最後は自分の母親で、社会人になる時に母から言われた「何事にも手を抜いてはならない。常に全力で当たれ。仕事に慣れてくると生意気になる。ただでさえ新聞記者は傲慢な仕事だから、謙虚にしなさい。そしてどんな人でも嫌いになってはいけない。嫌だと思ったらその人の中に自分よりも優れているものを見つけなさい」という3つの教えを一日たりとも忘れたことはない。

変革期こそ、人間性を鍛えて

橋本 2050年にどのような時代になるのか、どのような心構えで進むべきなのか、高校生にメッセージをいた

だきたい。

進藤 2050年には、政治、経済、社会が大きく変化するだろうが、正直どのようなようになるか私にはわからない。確実に言えることはデジタルトランスフォーメーション(DX)が想像以上に圧倒的なスピードで進み、仕事の仕方が変わり、教育のあり方も変わり、医療や物流、交通も無人化が進むということである。そして、グリーントランスフォーメーション(GX)、いわゆる脱炭素化が進み、広範な変革が進むであろう。

会社で長い間人事を担当し、能力にはスキル(技術、専門知識)、アティテュード(考え方、価値観、物の見方)、フィジカル(健康)の3つがあつて、これらは掛け算であり、どれか一つでもゼロだと全体がゼロになってしまうことを学んだ。だから、高校時代にこの3つのバランスのとれた人材を目指してほしい。鈴木健次郎先生は「青少年教育はハードトレーニングの場ではなければならない」と言われた。高校生

